
理沙と武志

bunz0u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理沙と武志

【Nコード】

N3912J

【作者名】

bunzou

【あらすじ】

前田武志と里山理沙は平和な学生生活をおくっていたが、ある日ある事件が起こり、そこから平和な生活にはころびがはいり始める、わけではありません。

キャラクター紹介

前田武志

高校2年生。どちらかというと無気力な学生だが、日常生活は意外としっかりしている。同級生の里山理沙とは親類及び同級生達に周知のカップル。

オシャレなどはあまりしないが、小物にはけっこうこだわりがあるらしい。あまり印象に残るような見た目ではない。部活はやっていないが、いくつか同好会をかけもちしている。

里山理沙

武志の同級生、クラスは別。活発で元気がいい。一言多いのだが、嫌味などところはないので嫌われてたりはしていない。武志のことを非常にかわいがっている。入学式で告白して現在に至る。

基本的にショートカットで、ナチュラルに見えるようにオシャレをするのが得意。その気になれば見た目で人の目を惹きつけられる。部活は科学部だがさぼりがち。

荒川良助

武志の同級生でクラスメート。よくつるんでいる。かなりずれた人間で、つきあいづらいのだが、自分なりの正義感を持っている。理沙とは幼馴染。一見中肉中背だが、実はかなりがっしりしている。ファッションは自分の趣味しか追求しない。部活には所属していないが、1人で経済学部と名乗る同好会をやっている。運動神経はいいので、そっちの部活にたまに乱入することもある。

真中さおり

武志の同級生でクラスメート。武志と理沙のことをうらやんでいる。しかし自分で恋愛をする気はない。微妙にずれた感性を持っている

が、本人は特に気にしていない。美人、ではあるが、それを生かそうとする気はないらしい。部活は陸上部で、黙々と短距離をやっている。趣味は読書で、いつも部活開始時間まで黙々と本を読んでいる。

前田涼子

武志の母親、41歳のシングルマザー。武志が物心つく前に離婚している。仕事は在宅でできるものを色々やっている。さっぱりとした性格で、実年齢よりも若く見られる。

田島弘之

武志の担任38歳。担当科目は社会科。経済学オタク。脱サラして教師になった。お気楽な性格。意外と生徒のことを考えていたりする。

1 ばん

前田武志、高校2年生は気持ちよく眠っていた。しかし、それはあまり続きそうになかった。

里山理沙、武志と同じく高校2年生が、前田の布団かたわらに座って、武志の寝顔をじっと見ていた。何を思ったか、理沙はショートカットの髪が武志の顔にかかるほど、自分の顔をぐっと近づけて、さらにまじまじとその寝顔を見つめた。

武志は何か異様な雰囲気を感じて、ゆっくりと覚醒した。目の前の顔をぼんやりと認識して、とっさに離れようとしたが、それは枕に阻まれた。

理沙は笑顔で、ゆっくりと武志の唇に自分の唇を重ねた。2秒ほどしてから、武志は強引に理沙の顔を押し返した。

「朝から何なんだよ」

武志は不機嫌そうだったが、理沙は実に機嫌が良さそうだった。

「朝だからこそじゃない。それに、本当は楽しんでたくせに」

「楽しんでない」

「またまたあ」

理沙は笑いながら武志の鼻をつまんだ。武志はその手をつかんでどかすと、ゆっくりと起き上がった。そして、その手を放して指先で理沙のおでこをぐっと押した。

「着替えるから、外で待っててくれよ」

「別に着替えさせてあげてもいいんだけどお」

「気持ち悪いこと言うな」

「はいはい、わかりましたよ」

理沙は渋谷部屋を出て行った。武志は枕元に置いておいた制服に手早く着替えてリビングに向かった。母親の前田涼子が本を読みながらパンをかじっていた。

「おはよう。理沙ちゃんが待ってるから、さっさと行きなさいね」

「わかってるよ。でも朝から家に入れるのはもうちょつと考えてもらいたいんだけどさ」

「別に、もう家族みたいなもんでしょ。いいからさっさと行った行つた」

武志は放り投げられた朝食と昼食代を受け取って、さっさと家を出た。5階ぶんの階段を駆け下りると、理沙が退屈そうに待っていた。

「待たせすぎ」

「5分くらいしか経ってないって。大体、お前のほうから押しかけてそれはないだろ」

理沙は武志のネクタイをグイッと引っ張って、自分の顔から1cmくらいの距離まで近づけた。

「模範的な回答とは言えませんね。謝罪と訂正を要求します」

武志はその手を振り払って、ネクタイを直した。先に立って歩き出そうとしたが、理沙が腕を無理やり組んできたのでそれはできなかった。理沙の顔を見ると、気持ちいいくらいニヤニヤしていた。

「そう焦らないで、ゆっくり行こうよ武志君」

「わかったよ」

そう言った武志は、それほど嫌そうな様子もなく歩き出した。

2 ばん

2人は校門前に到着した。武志は組んでいる腕を外そうとしたが、理沙はそれを許さず、武志をグイグイ引っ張っていった。校門には、武志の担任の田島弘之が本を読みながら適当に突っ立っていた。それでも、生徒が通ると顔を上げずにおはようと声をかけていた。

「おはよう。お前ら、今日も仲がいいな」

相変わらず顔は上げなかったが、武志と理沙には一言多かった。

「そう見えます?」

理沙は嬉しそうに、よりいっそう腕を絡ませて武志に密着した。

「幸せそうで何よりだ。ほら、さっさと教室に行った行った」

武志はいい加減、理沙から放れるのはあきらめたらしく、黙って理沙とぴったりとくっついたまま校舎に向かった。

「ねえ、あの先生ってさ、いつもああやって本読んでて顔上げないけど、誰が通るかちゃんとみてるんだ」

「目立ちすぎれば目に入るんじゃないか」

「全部あいさつしてたじゃん。それに」理沙は武志の顔に組んでないほうの手をそえて、自分のほうに顔を向けさせた。「こんなことすれば嫌でも目に入るだろうけどね」

理沙は目をつぶって、ゆっくりと自分の顔を武志に近づけていった。武志もなんとなくそれに応えていいムードになったが、それはいきなりグッと引き離された。

「おはよう、お2人さん」

武志と理沙が振り返ると、2人の肩に手をかけた、武志のクラスメートの荒川良助が眠そうな顔をして立っていた。

「ああ、おはよう」

「早く行こうぜ、学生の本分は勉強らしいからな」

良助は2人の肩を2回叩いてから、背中に手を添えて押し出した。武志はよろめいたが、理沙がすぐにその体を支えた。そして、良助

にたいしてすぐに振り返って口を開いた。

「ちよっと、恋人の甘い時間を邪魔しないでもらいたんだけど」
良助は2人を追い抜いてから、面倒くさそうに手を振った。

「それはどうも。俺は消えるから後は思う存分やってくれ」

良助は去っていったが、残された2人はさっきまでのムードを維持することはできなかった。武志はとりあえず腕を組んだまま理沙を引っ張っていった。

「邪魔者ばかりで参っちゃうよねえ、まあそれがいいと言えばそうだけど」

理沙はぶつくさ愚痴っていた。

3 ばん

教室に到着した武志はやっと理沙と離れて多少落ち着いていた。しかしそれも長くは続かない。

「よう、バカッパルの片割れ」

教室に足を踏み入れた瞬間に、良助が大声で声をかけてきた。クラス中の視線が一気に武志に集まった。いつものことなので、武志は別に気にすることもなく自分の席に向かった。クラスメート達の反応もそんなものだった。

「お前等のバカップルっぷりも完璧に飽きたらしいな」

「入学した時からだからな。普通の奴は飽きてどうでもよくなってるだろ。普通の奴ならな」

「おいおい、まるで俺が普通じゃないみたいじゃないかよ」

「鏡見ろ」

良助が反論しようとしたところで、田島が教室に入ってきた。

「おはよう。全員揃ってるか？」田島は教室をざっと見回した。「いるみたいだな。それじゃ、今日は珍しく話がある」

教室が少しざわめいた。いつもなら田島はすでに教室を出て行っているはずだった。

「おいおい、少し静かにして話を聞け。昨日のことなんだが、どうも校内に怪しい奴が侵入したらしい」

良助が勢いよく立ち上がった。

「それは変態ですか？ それとも泥棒ですか？」

「わからん。まあ、注意しとけよ。はっきりするまで、5時以降学校に居残るのは禁止だ。以上！」

田島はさっさと教室を出て行った。教室は雑然と雰囲気になった。しかし、武志と良助は特に騒ぐこともなかった。

「けっこう深刻な問題だと思わないか、武志君」

「そうだな。影響を受けそうな奴も多いな」

「まあ、俺やお前みたいに同好会とか部活に適當に参加してるぶんには関係ないな。普通にしてりゃ」

「何かたくらんでんじゃないか？」

「まさか。間違っても変態だか泥棒だかの顔を確認めてやろうとか、そんなことは微塵も思っていないぜ」

「自重しろよ」

4ばん

そしてあつという間に放課後。良助は実に楽しそうにカバンを抱えて立ち上がった。ブレザーのポケットがなぜか妙に膨らんでいた。武志は少し迷ったが、つつこみをいれることにした。

「お前、そのポケットはなんだよ」

「気になるか？ 気になるよなあ」

良助はうれしそうな表情を浮かべて、ポケットに手を突っ込んだ。そこから出てきたのは、何やらものものしい手袋だった。聞かれもしないのに良助は語り始めた。

「これはな、ただの手袋じゃない。まずこの繊維なんだが、アラミド繊維でな、しかも芯にステンレスワイヤーが使われてる特殊仕様だ。しかもここ、拳のところを見ろ、ガードがついてるだろ？ これはお手製なんだが、なかなかいいできで、そこらへんの壁を力いっぱい殴っても痛くもなんともない。どうだ？ 最高だろ」

まわりの人間は誰も聞いていないし、武志も適当にうなずいているだけだった。しかし、良助はそんなことは気にしない。

「これさえあれば変質者でも何でもかかってこいだぜ。ま、そういうわけだから、お前は気をつけながら安心して帰れよ」

良助はそう言って教室から出て行った。入れ違いに理沙が教室に入ってきた。なぜか廊下のほうを見ながらしばらく入り口で立ち止まっていたが、教室内に向き直るとすぐに武志を見つけて、近づいてきた。

「今、変なものとすれ違ったんだけど」

「それは気にしないでいいから。それより不審者が出たって、聞いたか？」

「聞いた聞いた。変態っているもんだよね」

「いや、まだ何だかわかってないんだろ」

「学校に忍び込むなんて変態に決まってんじゃない。きっと誰のだと

かかまわずに自転車のサドルのにおいをかぎまくるような変態だつてば」

「やけに具体的だな」

「だって、特になにか盗られたりしてないみたいじゃん。ということとは、そういう変態行為をしにきただけなんじゃないの？」

「ひょっとしたら、隠しカメラでも仕かけたのかもな」

理沙は2歩ほどあとずさって、そこのかたわらに座っている女子の肩に手を置いた。

「今の聞いたさおりちゃん？」

声をかけられた真中さおりは、読んでいた本から顔を上げて、メガネを直してからぼんやりと理沙と武志を交互に見た。

「えーっと、なに話してたの？」

5ばん

「まあ、つまりそういうこと。わかった？」

理沙は大体のことをさおりに説明し終わった。さおりは初めて聞いたというような顔でいちいちうなずいていた。

「そんなことがあったんだー」

「話聞いてろよ」

武志はあきれたようにつぶやいたが、理沙もさおりも適当に流した。

「まあそれでさ、こいつが隠しカメラを仕かけたとか言ってるの」

「カメラって？ どこに？ なんで？」

「それは俺じゃないぞ」

武志の事実である否定にも耳を貸さず、理沙は続けた。

「いい？ 世の中にはマニアックな連中がいんの。トイレとか撮って喜ぶような連中とか、ゲロ吐いてんのが好きな連中とかさ」

「変わった人もいるよねー」

「そういうこと。で、それが理解できちゃってる奴もいんの」

「え？ 誰が？」

理沙は黙って武志を指差した。さおりはその指と武志を交互に見て首をかしげた。

「えーっと、前田君は変態？」

武志はあきらめの表情で特に反応しなかった。一方理沙は実に楽しそうにしていた。

「そうそう、そういうことと思いつく奴はちょっとは同類なわけ」

「同類」さおりは理沙の顔をじっと見つめた。「それじゃあ、理沙ちゃんもそういうことしてあげてるの？」

一瞬場が固まった。理沙はすぐに復活して、表向きはなんともないような顔をした。

「まさか！ そんなんだったらゴミ処理業者呼んでるって」

「だよねえ。あ、それじゃ、わたしは部活だから。じゃーね」

さおりは笑顔で去っていった。理沙は少し気まずそうに武志を見た。

「まあほら、別に本気ではそんなことは思っていないから」

「そうか？」武志は立ち上がって、理沙を抱き寄せた。「案外、あつてるかもしれないぜ」

「ばーか」理沙は武志の鼻の頭を軽く押してから、耳に顔を寄せた。

「でも、それでもいいよ」

「冗談だ、冗談だよ。やめとけて」

武志は慌てて理沙を引き離れた。

6ばん

「ほらほら、起きた起きた」

翌朝、武志は理沙の声で目が覚めた。

「なんだよ、早くないか？」

「早くない早くない。それよりもニュースがあるから、ほらほら目覚めろ目覚めろ」

理沙は武志の足の裏やらなんやらを勢いよくくすぐった。武志は慌てて起き上がった。

「わかった、わかったからやめてくれ。いったい何なんだよ」

「うん、昨日さ、学校でぼや騒ぎがあったらしくてさ」

「ぼや？　なんでだよ」

「ほら、例の不審者。あれが絡んでるらしいんだって」

「それ本当か？　誰か目撃者でもいるのかよ」

「ま、噂だから。学校行けば詳しいことわかるんじゃない？」理沙は目を輝かせて手をわきわきさせて武志におおいかぶさった。「と、いうわけで、お着替えしましょうか」

もちろん武志は理沙を押しのかた。

「わかった、わかったからリビングか外で待ってろ」

「はいはい、全くつれないつれない。おかーさまー」

騒々しく出て行った理沙を無視して、武志は手早く着替えた。リビングに行ってみると、理沙と涼子が朝から妙に盛り上がっていた。

「着替えだからって追い出すのって愛が足りないと思いませんか？」

「あー、どうだろうね。あたしはそういう経験ないからなんとも言えないけどさ、あの子はあれでシャイだから、愛ゆえってのもあるんじゃないの？」

「なるほど、好きな人の前では素敵なあたしでいたいのに！　っていうやつですね」

「そうそう、花も恥らうお年頃ってやつ」

2人はわははと笑っていた。武志はできるだけ静かに理沙の背後に近づいた。もちろん涼子は気づいたが、武志は目で黙っていると伝えた。そして理沙の肩に両手を置いた。

「楽しそうじゃないか」

理沙は振り向かず、肩に置かれた手をつかんだ。

「もちろん、すぐく楽しい。もっと楽しくする？」

そう言って、自分の胸元に武志の手を引っ張りこもうとした。武志は手を引き抜いて猫だましを一発きめて理沙の隣に座った。

「朝からそういうことはやめとけよ」

「ほう、それじゃ夜はやりたいほうだいかな？ 避妊はちゃんと複合的にしとけよ、君達」

涼子は実にいい表情でニヤニヤしていた。とても母親とは思えなかった。

7ばん

学校に到着した武志は理沙から可能な限りすぐに離れて教室に急いだ。しかし、教室に到着してみると、理沙が武志の席に座っていた。

「いよっ、朝から元氣にご苦労さん」

理沙は元氣に手を上げて武志を迎えた。なぜか良助もニヤニヤしながらその横に座っていた。武志は非常に嫌な予感がした。

「なんでお前らここに居んの？」

「つれないなー武志君。クラスメートにそんな態度はないだろう？」

「そうそう、クラスメートじゃないけど彼女にそれはないんじゃない？」

2人の態度に武志はためいきをついてカバンを机の上に置いた。しかし、それはすぐに床に降ろされて、1枚の写真が机の上に置かれた。

「なんだそれ」

武志はそう言いながら写真を手にとった。それには学校の塀を乗り越えようとしている不審な人物が写っていた。

「どうだ、大したもんだろ」

良助は胸をはって得意がった。それに興味をひかれて、何人かのクラスメートが集まってきた。誰もが写真を覗きこんで驚きの声をあげた。

「何だよこの写真！」

「何だって？ 昨日田島ちゃんが言ったこと覚えてるよな。まあこいつは例の不審者だ。で、これは昨日の写真だ」

「どうやって撮ったんだよ？」

「まあ、色々だよ。赤外線センサーとかな」

良助のテンションとは逆に、クラスメート達は黙って離れていた。ふいに肩に手を置かれた良助は、振り返ってからわざとらしく

驚いた顔をした。

「おや先生、今日はお早い出社ですね」

田島は仏頂面で教室を見回した。生徒達は慌てて席に着いた。理沙と良助は特に慌てる様子もなかった。

「お前な、そういうことはやめとけ。それから里山、彼氏が恋しいのはわかるが、自分のクラスに行っておけ。あんまり担任を苦労させるんもんじゃないぞ」

理沙は舌を出して、からかうような表情を浮かべた。

「おっしやる通りですね、先生。それじゃ自分のクラスに戻ります」

教室から出て行った理沙を見送ってから田島はため息をついて教壇に向かった。

「聞いた通り、不審者が昨日も出たそうだ。しばらくの間は強制的に早く帰らせることになるからな、しっかり覚えておけよ」

8ばん

昼休み。武志と良助は学食に来ていた。武志は無難な日替り定食、良助は多少の冒険をすることにしたようだった。

「モルモットメニューでよろしく、おねえさん」

調理のおばちゃんにそう言って、札を手渡した。

「いつもありがとね。ほんと、助かってるわー」

つり銭を良助に手渡ししながら、おばちゃんは満面の笑みを浮かべた。そして、冷蔵庫を開けると、実に楽しそうに色々な材料を取り出し始めた。その様子を見ながら、武志は良助に小声で話しかけた。
「お前、よくあんなの実験体になるな」

「甘いな」良助は馬鹿にしたような笑顔を武志に向けた。「材料から考えたコストパフォーマンスは抜群だ。それに、食えないものは出てこないぞ」

「そう思ってるのはお前だけだよ」

「よっ、しっかり食べてる？」

そう言って、理沙が武志に背後から抱きついた。武志は特に振り払うこともなく、そのままの状態で顔だけ後ろに向けた。

「これからだ。人体実験をする奴もいるけどな」

「おいおい、実験じゃないぜ。割のいい昼飯ってだけだ」

「じゃ、あたしもそれで」

理沙も良助と同じように札を出した。おばちゃんはますます嬉しそうにしながらつり銭を返した。

「今日のは自信作になる予定だからね、期待して待っててね」

「もちろん」

つり銭を受け取りながら、理沙も満面の笑顔で応えた。武志はあきれながら自分の定食を受け取って、さっさと席を確保しにいった。
「おい」良助はそれを見て、理沙に耳打ちした。「相変わらずあいつはノリが悪いな」

「あれでもだいぶ良くなったんだけど」

「そうだけどな。でも、もうちょっと頑張ってもらいたいだろ」

「別に、その微妙なところがいいんじゃない。あんたみたいな変態になったらやってらんないから」

「はいおまち！」

その会話を断ち切るように、おぼちゃんが極めて見た目の悪い料理をカウンターの上に置いた。

それを持って、2人は武志が確保したテーブルに向かった。

9ばん

そして放課後。良助はどんどん舞い上がっているように見えた。

「いやなあ、昨日は写真だけだったけど、今日はそれ以上の収穫を
目指すぜ」

周囲は面白そうにはやしたてていたが、武志はしぶい顔をしていた。良助はそれに気づいて、わざとらしいオーバーアクションをしながら、武志を指さした。

「なんだかノリが悪い奴もいるみたいだけどな、俺はやめないぜ。
それはなぜか！」良助はぐっと握りこぶしを天井に向かって突き上げた。「諸君！ここは我らが学園だ！そんなところを変態の侵入者野郎に好きにさせとくわけにはいかないからだ！」

拍手喝采。良助はそこらじゅうの連中と握手してまわった。唯一、相変わらず面白くなさそうな顔をしているのは武志だけだった。しばらくの間、教室はそんな雰囲気支配していたが、しだいに落ちていて、いつの間にか、良助と武志だけが教室に残っていた。

「お前さ、何でまだ残ってたんだよ。基本帰宅部だろ」

良助はニヤニヤしながら言った。武志はそっちを見ずに手だけ振った。

「お前と同じで好きなことだけやってるんだ」

「そうかい」良助は武志の肩に手を置いた。「じゃ、楽しいことを探しに行こうぜ」

「男2人ですか？ むさいと思わないのか？」

いつの間にか教室の出入口に理沙が立っていた。良助はにやりと笑った。

「女が1人加わればOKか？」

「その通りだね、武志くん」理沙はふざけた調子でそう言うと、武志に歩み寄って、その腕をとった。「じゃ、とりあえず落ち合う場所を決めときましようか。ずっとここでたむろしてるわけにもいか

ないし」

「おいお前ら」武志は良助と理沙の腕を振り払った。「人の意思を無視するなよ」

「何が意思だよ。ここまで居残っておいで今更そういうこと言うなよ」

「そうそう、恥ずかしがらずに自分の気持ちに正直になったほうがいいと思わない？ いつもやってるみたいにさ」

「いいかげんなこと言うなよ」

そう言いながらも、武志は帰る様子も見せずに座ったままだった。「素直じゃないのも、困ったもんね」

理沙は理解がありそうな、含みのある笑顔を浮かべていた。

10ばん

その夜、例の3人に加えて、なぜかさおりまで校門の前にいた。

武志は相変わらず機嫌が悪そうだった。

「なんで俺はここに來てるんだろうな？」

良助と理沙はあきれた表情を浮かべて首を振った。

「お前さ、今ここに來てるのにそれはないだろ」

「そうそう、ママのおっぱいでもしゃぶってればよかったんじゃない？」

そう言いながら、理沙は武志の脇腹を肘で突つついた。武志はその肘をつかんで、理沙をぐっと自分の方に引き寄せ、その顔を自分に向けさせた。

「俺はな、お前らが勝手なことをやらないようにするために來たんだ」

武志は厳しい顔でそう言ったが、理沙はそれを気にせず、その腰に腕をまわした。

「そう、守ってくれるのね」

「違う。でもな、何かあれば、そうするつもりだ」

さおりはそのやりとりをうっとりとして見ていた。

「やっぱ本物は違うわあ」

「いちやつくのはそのくらいにしとけよバカップル」

良助はそう言うってから、昨日の放課後に武志に見せたグローブを着けて、カメラを取り出した。

「そろそろ行くぜ」

にやりと笑って校門を乗り越えた。後の3人もそれに続いた。

夜の学校は当然ながら静かで、なんとなく不気味な雰囲気があった。明かりは良助のヘッドランプと武志の持ってきた懐中電灯だけだった。

正面玄関の前まで到着すると、良助はポケットからなにかの道具

を取り出して、あっさりとピッキングで鍵を開けた。

「すっごーい」

さおりが感心して良助の手元を覗き込もうとしたが、その道具はすぐにしまわれてしまった。

「おっと、こいつは一般人には見せられないな」良助はにやりと笑った。「俺の秘密の七つ道具だ」

「そんなもん鍵屋なら普通に持つてるだろ」

武志のつつこみにも良助はまったく動じる様子はなかった。

「鍵屋ならな。でも俺は違う」

「あー、はいはい」

理沙が3人の間に割って入って、ドアを勢いよく開けた。

「大事なの中に入ることに。どう入るかは、どうでもいいでしょ」

11ばん

夜の校舎は不気味な雰囲気が充満していた。しかし、廊下を歩く4人にはそんなものは関係ないらしかった。

「お前さ、ポテトとか食うなよ」

「何でだよ」

武志に注意された良助は、不思議そうにその顔を見ながらポテトチップスを口に放り込んだ。さおりもその袋に手をつっこみながら不思議そうな顔をした。

「そうそう、前田君、どうしたの？」

理沙も武志の顔を面白そうに見ながらポテトの袋に手を伸ばした。「別にさあ、すでに不法侵入してんだから、今更そんな硬いこと言うことないじゃない、武志君」

理沙の言葉に、武志はイラっとしたが、すぐにあきらめの表情になった。

「勝手にしろ」

しかし、そう言った武志の前に、ポテトの袋が差し出された。武志は思わず手が伸びた。

「そうそう、それでいいんだよ」良助は満面の笑みでうなずきながら、自分もポテトを口に放り込んだ。「しかしなあ、どうもあんま怪しい雰囲気がないな」

「そうかな？ 不気味な雰囲気はかなりあると思うけど」

微塵も不気味じゃなさそうな様子でさおりは首をひねった。

「いやなあ、確かに不気味かもしれないけど、犯罪の臭いはしない感じだろ？」

「犯罪の臭いってのはよくわからないけど、確かにそうかもね。静かだし」

理沙は良助の言葉に納得したように言ったが、武志はその理沙の言葉に首を横に振った。

「騒々しい空き巣がいるかよ」

「わかってないなお前は」良助はわざとらしいためいきをついた。

「よく訓練された空き巣はな、騒々しくしても大丈夫なところを選ぶんだよ」

「お前空き巣に入ったことあるのかよ」

「甘いな」チツチツと、舌を鳴らしながら良助は人差し指を振った。「それくらいは常識だぜ、武志君」

「ああ、そうか。お前の常識はよくわかったよ」

武志はそう言って足を速めた。理沙がその腕をつかまえて一緒にどんだん先に進んでいった。

「それじゃ、2階で落ち合いますようか。ちょうど中間」

「そうだな、せいぜいちゃいちゃしろよバカップルども」良助はヘッドランプを点滅させて2人を見送ってからつぶやいた。「あいつらお熱いね」

その言葉に、さおりは大きくうなずいた。

「じゃましないようにゆっくり行ったほうがいいね」

12ばん

理沙と武志2人になっても、夜の学校の不気味な雰囲気は関係ないようだった。しかし、一応理沙は武志の腕に自分の腕を絡ませて、ぴったりと体をくっつけていた。

「歩きにくい」

そう言った武志に、理沙はわざとらしい困った表情をうかべた。

「でもさ、たしかに不審者ってのが出てきたらこれだと困るかもね」
「そうだな。だからその腕を放せよ」

「はい」

理沙はパツと絡めていた腕を放した。変わりに武志の腰に腕をまわした。さっきよりもさらに体が密着した。

「いや、これじゃ駄目だろ」

「どうして？ 手は自由になったでしょ。それであたしを守ってよ」

理沙はますます強く、武志の腰にまわした腕を締め上げた。武志は理沙の肩に腕をまわしてぎゅっと抱き寄せた。

「わかったよ。それより、どこを見てまわる？」

「とりあえず上から順番に見ていけばいいんじゃない」

「そうだな、安全そうだし、そうするか」

「いやー、保守的ー」

理沙はそう言って笑った。

いっぽうそのころ、良助とさおりは武志達とは逆に、1階からまわることになっていた。

「武志の野郎はたぶん上からまわるだろうから、俺達は下から行こう。そのほうが不審者に会う可能性も高くなるからな、たぶん」

武志はそう言ってさおりを説得したようだった。2人は気楽な様子でお菓子をぱくつきながらゆっくりと歩いていた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

「良助さんと武志くんは、ここに入ってから知り合ったんだっけ？」

「ああ、そのわりには親しそうだろ」

「ほんと、そうだねー。もうびっくり」

まったりとした雰囲気だった。

13 ばん

武志と理沙は3階を一通り見てまわった。特に怪しい人影はなく、暇な夜警の見回りという感じだった。

「せっかくの夜の学校だったのに、何も面白いことがなさそうじゃんねえ」

「なにかあるよりはましだな」

武志は先に立ってどんどん歩いていった。武志の腰に腕をまわしている理沙はそれにどんどん引っ張られた。

「ちよっ、ちよっとゆっくり、もうちよっとゆっくり歩かない？」

「えっ」

珍しくあわてた様子の理沙に、武志は満面の笑みを浮かべた。そしてさらに足を速めようとした。

「ああ、もう調子に乗るなってば」

理沙は武志にしがみついて無理やりスピードを落とさせた。武志は負けずに理沙の腰に腕をまわして、グツと持ち上げてスピードを上げた。

「おっ、力強いねえ」

笑顔の理沙はしばらくの間そのまま引きずられていたが、武志はすぐに立ち止まってしまった。理沙が不思議そうに武志の顔を覗き込むと、真面目な顔があった。

「なあ、下のほうから何か、音がしなかったか？」

理沙は周囲を見回してから首をかしげた。

「別に、何も聞こえなかったけど」

武志は理沙の反応を見て、しばらく考え込むように腕を組んでうつむいた。理沙もなんとなく黙ってその様子を見ていた。

「よし」武志はおもむろに顔を上げた。「下に確かめに行くぞ」

「はいはい、それじゃちよっと待って」

理沙はそう言ってトイレに入って行った。出てきたときにはモッ

プを2本手に持っていた。

「なんだよそれ、おっと」

理沙はモップの1本を武志に投げて渡した。

「怪しい奴がいるかもしれないなら、武器くらい持ってたほうがいいでしょ」

14ばん

2人は2階は飛ばして、1階に急いだ。一見したところ何も異常はなさそうだった。しかし、理沙が廊下のつきあたりを指差して口を開いた。

「ちょっとまずいかもね」

武志は立ち止まって、目を凝らした。確かに怪しい人影が見えた。「あたしは外からまわるから、正面からの時間稼ぎはよろしく」

「おい、まだ何もわかったわけじゃ」

武志の言うことを聞かずに、理沙はさっさ外に向かった。武志は仕方なく、廊下のつきあたりに向かってゆっくり歩き始めた。近づくにつれて、なにか声が聞こえてきた。

なにを言っているのかはわからなかったが、さおりの声のようだった。それと、なにか切迫した状況だということだけはわかった。

武志はとにかく急いだ。

廊下のつきあたりまでくると、床に倒れた良助と、怪しい若い男と対峙しているさおりの姿があった。さおりは男から離れよとしていたが、すでに壁に到達していてじりじりと追いつめられていた。

「おい！」

武志のするどい声に、怪しい男はビクツとして振り向いた。平凡な顔をしていたが、手にはかなづちを握っていた。武志はモップを慎重にかまえた。

「とりあえず、そいつから離れてもらおうか」

怪しい男は無言で後ずさると、いきなり振り返ってさおりをつかまえようとした。さおりは逃げようとしたが、足がもつれて怪しい男につかまってしまった。

「動くな！ 動くなよ、こいつがどうなってもいいのか！」

かなづちを振り上げた威嚇された武志は、モップをかまえるのをやめて一歩下がった。

「わかった、落ち着け。とりあえず、その物騒なものを下ろしてくれないか」

「まずはお前のそのモップを捨てろ！」

「ああ」武志はゆっくりとしゃがんでモップを床に置いた。そして、両手を上げて下がりながら立ち上がった。「捨てたぞ。これで落ち着けるだろ」

「お前ら、なんなんだ」

多少落ち着きを取り戻した怪しい男は、ゆっくりと前進しながら、かなづちを武志のほうに突き出してそう言った。

「この学生だよ」武志は男と同じ歩調でゆっくり後退した。「そういうあんたは」

「おれか？」

怪しい男はにやりと笑った。その時、武志の視界の隅に、外からまわりこんでいた理沙が男の背後に到達したのが映った。

「言うわけないだろ、ガキが！」

「理沙！」

怪しい男の言葉と同時に武志は叫んだ。理沙はモップを男の手に投げつけてかなづちを弾き飛ばした。武志は床のモップを足で跳ね上げてつかむと、その勢いのまま、男のみぞおちにモップの柄を叩きこんだ。

15ばん

怪しい男はスローモーションのようにさおりを離して前のめりに倒れた。武志がそれに近づこうとした時、いつのまにか立ち上がった良助が男の顔を思い切り蹴り上げていた。

「やってくれたじゃねえか」

良助は頭から血を流しながら、真っ赤な血を口から吐き出した。そして、武志が止めようとするのも間に合わず、続けざまに男の顔と言わず腹と言わず、連続して蹴り上げた。

「少しは！ 反省しろよ！ このクソ変態が！」

良助は完全に頭に血が上っていた。

「ちよっと、それ以上はまずいって」

理沙が後ろから抱きついて止めようとした。だが、良助はそれですぐに振り払った。

「やめろ！」

武志が続けざまに良助に飛びかかって、なんとか怪しい男から引き離れた。良助を壁に押し付けて、両肩をぐっと握った。

「落ち着け。もう十分だろ」

良助は血走った目でしばらく肩で息をしていたが、ふっとためいきをついた。

「わかった、わかったから離せよ」

ゆっくと武志の手が離されると、良助は自由になった腕で頭の血をぬぐった。それからいつもの調子を取り戻して、倒れている怪しい男を顎で指した。

「で、その変態はどうする？ 裸に剥いてから縛ってそこらへんに転がしとくか」

「当直の先生に知らせよう」

「あーあ、気が進まないな。それより、さおりちゃん大丈夫？」

さおりに肩を貸していた理沙が心配そうにその顔を覗き込んだ。

さおりは演技でなく、笑顔を一同に向けた。

「大丈夫。怖かったけど、こんなスリルなかなか体験できないもんねー」

「らしいな」

3人は声を合わせて、そう言って笑った。

「それじゃ、そろそろ当直さんと呼んでくるか。おい、ちよつとベルト貸してくれよ武志君」

「ああ、そうか」

武志はベルトを外して良助に渡した。良助は自分のベルトも外して、それで悶絶している怪しい男の足と手をきつく縛った。

「それじゃお2人さん、メッセンジャーよろしく」

良助はすっきりした笑顔を理沙とさおりに向けた。

16ばん

武志はまどろみながら、自分の唇に何か触れているのを感じた。ゆっくと覚醒していくと、目の前に理沙の目があった。武志はすぐに理沙を引きはがした。

「ちよっとちよっと、お目覚めのキスにそれはないでしょ。本当は楽しんでたくせに」

「楽しんでない」

「またまたあ」

「着替えるから外で待っててくれ」

ふくれっ面の理沙を追い出した武志は、手早く着替えてリビングに向かった。涼子がパンをかじりながら本を読んでいた。その横では、理沙がイヤホンをして音楽を聴いていた。

「なんか、いつもより人が多い気がするな」

「そういうことを言うもんじゃないぞ息子よ」涼子は本から顔を上げずにパンをかじった。「理沙ちゃんから聞いたけど、昨日はすごいナイト様だったみたいじゃない。だからさ、理沙ちゃん是不安なわけよ」

「なにが」

「王子様を奪われちゃうんじゃないかって」

「イヤダー、お母様」

理沙と涼子は顔を見合わせてわざとらしくニヤニヤした。武志はあきれたように2人を見て、トーストを口に押し込んだ。

「ほら、さっさと行くぞ」

武志は立ち上がって理沙に手を差し出した。理沙は笑顔でその手を握って立ち上がった。そして、家を出てからしばらくして、武志がぼつりとつぶやいた。

「実はな、昨日はけっこう不安だったよ。よくあの男を取り押さえたりできたもんだよな。それに良助のやつ、完全にキレてたな」

「まあ、あいつは昔からあんな感じだけどね。ま、それは置いといて」理沙は武志の腕にぎゅっと抱きついた。「あたしは不安じゃなかったよ。2人なら、絶対に大丈夫だと思ってたから」

武志は笑顔を浮かべて、理沙の頬をかるく叩いた。

「かもな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912j/>

理沙と武志

2010年10月8日15時24分発行